「失いつづけたすべてのものの打ち上げられる場所」と「行くべきところ」との間で

――文学教育の「転回」と「希望」のために――

山元隆春

1　須貝千里の問い

須貝千里は二〇〇六年九月の本誌「読む」欄で、拙著『文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシー実践に向けて―』(1)を検討の対象とした(2)。「言葉ひとつ」と題されたこの論考は、拙著に対してきわめて真摯かつ丁寧な議論を示しながら、文学教育の「転回」の条件を問うた論文であった。かさだけが多い拙著を幾たびも読み返し、拙著に読み取ることのできる一貫した矛盾や問題点を鋭く指摘していただいたことに感謝したい。

ロラン・バルトの論(3)を踏まえながら、須貝は言う。

バルトは「テクスト」を「還元不可能な複数性」として問題にし、「容認可能な複数性」として問題にすることを排している。読むことは「通過であり、横断である」というべき行為であり、「テクスト」はその行為の所産としての一回性の現象である、と言う。その行為は「書かれたモノ」(元の文章)に還ることはできないから、「還元不可能な複数性」と言わざるをえない。読んだ後の「書かれたモノ」(元の文章)は「物質の断片」でしかない。それは「テクスト」ではない。何度同じ「書かれたモノ」(元の文章)を読み返しても、問題は原理的に同じことである。それは言葉の有限性への徹底的な自覚である。それゆえにバルトは「テクストに定義はない」と言ったのであろう。

ところが、山元氏の「テクスト」は「書かれたモノ」(元の文章)のことであり、読むことの対象である。「テクストと読者の相互作用」とは「作品」を生み出していく過程である。「テクスト」の表現や叙述が「読者」に働きかけ、「読者」の内面世界が「テクスト」に働きかける。これが「相互作用」である。「テクストと読者」の関係は生きて還る関係であり、両者はともに実体(モノ)としてとらえられている。こうした考え方は、従来の「作品と読者」という関係に通底しており、表面的に「作品」という重さを減量することにはなっても、同様に実体論の範疇を超えていない。

ここが問題である。

これを認めてしまえば、氏の「テクスト」は「物質の断片」を蘇生させ、生きて還る場所となり、読みの正解を担保する実体となってしまう。それだけでなく、同時に「読者」という実体も機能させようというのだから、そこにエセ読みのアナーキーという事態が出現することになる。この事態をバルトは「容認可能な複数性」として、徹底的に排した。「テクスト」を完全に実体から切り離さなければ、テクスト論は画期的意味を失ってしまうからである。

山元氏の「テクスト」とバルトの「テクスト」の違いは、「テクスト＝書かれたモノ」と「読者」という二元論で考えるのか、「テクスト＝読書行為そのもの」という一元論で考えるかの違いということになる。この違いに気づき、読むことの根拠について考え抜くことが、「テクスト」という用語を用いる場合に決定的に重要なことなのである(4)。

わたくしが拙著において「テクストと読者との相互作用過程」を拙著の中心的探究課題としたことは、須貝が的確に述べている通りである。その「相互作用過程」をわたくしは次のようなヴォルフガング・イーザーの言にしたがって「作品」（バルトの言う、作家のこしらえた「作品」とは異なる、と考える）とした。

作品は読者による具体化をまって、初めてその生命をもつがゆえに、テクスト以上のものであり、具体化は読者の主観に全く束縛されないことはないが、その主観性はテクストが与える条件を枠として働いている。つまり、テクストと読者とが収斂する場所に、文学作品が位置している。こうした場は、当然のことながら潜在的にしかありえない。それは、テクストそのものにも、読者の主観にも還元しえないためである。これをいい換えれば、文学作品は、読書過程においてのみその独自の姿を示す、ということになる。従って、これからの論議で文学作品といえば、テクストから呼びかけられた読者が遂行する構成過程を念頭に置いている。つまり、文学作品とは、読者の意識においてテクストが構成された状態を指す(5)。

また、次のようなルイーズ・ローゼンブラットの言にしたがって、「交流」であるとした。

小説や詩や戯曲は、読者がそれを一組みの意味のあるシンボルへと変換しなければ、単なるページ上のインクの染みのままである。文学作品は、読者とテクストとの間で生じる生きた回路のうちにあらわれる。すなわち、読者は言語シンボルのパターンに知的・情緒的な意味を吹き込み、また言語シンボルのパターンは読者の思考と感情を導く。こういった複雑な過程の結果として、程度の差こそあれ組織化された想像的経験が生じてくる(6)。

文学経験とは、読者とテクストとの《交流（transaction）》であると言い換えなければならない(7)。

ローゼンブラットはこうした「交流」が、ある一つの状況のなかで営まれるものだとしている。だから、ローゼンブラットにとって「テクスト」（須貝の言う「元の文章」）と「読者」とがある一つの状況下でかかわりあう営みは「相互作用（interaction）」ではなく「交

流」であり、一回性の経験である。

わたくしはこうしたイーザーとローゼンブラットの議論をもとに拙著をまとめているが、「交流」と右にローゼンブラットが述べる過程で営まれるなかでイーザーの言う「作品」が生み出されるということが重要なことであると、今も考えている。本論のなかでは、その「交流」（「生きた回路」）のなかで、須貝の言う意味の「テクスト」を位置づけることができるかどうかを考えていく。そのことを通して、拙著に対する須貝の問いに不十分ながら応じ、「文学教育」の「転回」と「希望」について論を展開していかなくてはならない。

2　テクスト・作品・読者・交流

須貝は言う。

> 「テクスト」という「言葉ひとつ」の問題は、「あらゆる言葉」が「対象そのもの」との隔絶に晒されているのだが、知覚以前の対象の実体性の領域との葛藤という事態によって、日々、わたしたちは世界を創り変えている、という問題と向き合うための扉となっている。知覚以前とは言葉以前の領域であり、実体としての「対象そのもの」ではない[8]。

「あらゆる言葉」が「対象そのもの」との「隔絶に晒されている」事態とは何か。「知覚以前の対象の実体性の領域との葛藤という事態」とは何か。

読書した後、その本の内容を忘れてしまうことがわたくしには少なくない。しかし、それでも、頭のなかにあるいくつかの記憶の断片をもとにしてわたくしはその本について語る。たとえば、先日わたくしはカズオ・イシグロの『わたしを離さないで Never Let Me Go』[9]を読んだ。『わたしを離さないで』について語るひとことひとことの間で見解の相異が生じた場合、いずれが説得力を持つかということを仮に決めるとして（ひとは常にそのようなことをしなければならないわけではないが）、各々の見解の根拠を求めて『わたしを離さないで』を再び参照することができるのか。その場合、『わたしを離さないで』のここにこういうことが書かれてあるからわたくしの解釈の方が正しいと言うことができるのか。

もしも『わたしを離さないで』のことばを正確に引用することが解釈の妥当性を担保するものであるというなら、『わたしを離さないで』をすべて内化したひと（すなわち全文を暗記しているひと）がもっとも妥当な解釈者であると言うことができよう。しかし、実際のところ、そのようには言うことができない。『わたしを離さないで』のことばをいかに正確に記憶していても、そのひとの解釈がもっとも説得力に富むということにはならないからだ。

拙著でわたくしが用いた「テクスト」ということばは、おもに「書かれたモノ」を指していた。すなわち、紙その他の媒体に手書きで書き込まれたり、印刷されたり、電子的に作成されたりしたモノである。もちろん、それには物質性がありはするけれども、わたくしたちは紙（の束）を読んだり、石を読んだり、ディスプレイを読むわけではない。「テクスト」を読むというときに、わたくしたちが読むのはインクのシミであったり、液晶モニターのドットが織りなす紋様であったりする。だが、もちろん「テクスト」の指し示す対象はそれだけにとどまらないのではないか。

あらゆる「表徴」をも指し示す概念である。たとえば、おなかを押さえて苦痛に顔をゆがめている人物を目の前にしたときに、わたくしたちは「どうしたのですか？」と声をかけるだろう。そのとき、わたくしたちはその人物が「腹痛」を訴えていると解釈している。少なくともその人物の「表徴」を解釈したわけであり、そのときその人物の「表徴」は解釈するわたくしにとって「テクスト」となる。では〈腹痛を訴える人物〉という「作品」を作ったわたくしの行為は是か非か。その後にその人物を病院に連れて行ったわたくしの行為は是か非か。さらに、その人物の行為が演技であったことをその病院で当人から暴露されて、呆然とするわたくしは滑稽な存在か。わたくしはそうではないと考える。その人物の様子（「テクスト」）を解釈して〈腹痛を訴える人物〉という「作品」をつくりあげたわたくし（「読者」）の行為は報われないのかもしれない。しかし、わたくしがその人物を〈心配した〉ということは残る。慌てて病院に連れて行ったという事実は残る。そのひとをどうにかして問題のない状態にしてあげようとした気持ちは残る。そのときのわたくしは「だまされやすい」読者だったのかもしれない。「鋭敏な」読者であれば、構成する「作品」はまた異なったものになったであろう。「鋭敏な」読者であれば、その人物の行為（「テクスト」）のなかにどこかつじつまのあわない部分（フラジャイルな（脆弱な）要素）を見つけ、それを演技だと看破することができるのかもしれない。

この例は、「テクスト」を「実体」としてみなしているだろうか。わたくしの頭のなかで作り上げた例であるとはいえ、ある人物の行為に言い及んでいるのだから「実体」だと言えなくもない。しかし、ここで「テクスト」としているのはある人物そのひとではない。その人物の行為なのだ。その行為が何かの「表徴」となっているとわたくしが見なしたので、その行為は「テクスト」となったのである。そして、その人の行為をわたくしが「表徴」と見なすことと、その人の行為が「テクスト」となることと、それをわたくしが解釈して〈腹痛を訴える人物〉という「作品」を作り上げることはほぼ同時に営まれたはずである。

じつにわかりにくい物言いになってしまったが、わたくしが拙著において「テクストと読者との相互作用」が「作品」を生み出すと述べたのは、そのような意味である。だから、その「相互作用」の過程も「作品」も一回性のものなのである。繰り返すことのできない行為になるのだ。

読者のなかに「テクスト」が成り立つことと、その読者にとっての「作品」が生起することは同時に営まれる。だからこそ「テクスト」を「解釈する」ことはできない、とも言える。読むという行為を上述のように捉えてしまうなら、解釈の妥当性の担保を「テクスト」に求めることはできないからだ。

先ほどのおなかを押さえた人物の例で言えば、わたくしの生み出す「テクスト」はわたくしが生み出したものであるという他はないからだ。他のひとは（「明敏な」ひとは）それが演技だと考えるかもしれない。が、わたくしたちはそれでも「表徴」を繰り返し読むことはできる。そのような「表徴」を捉えたのはわたくしの主観であり、「作品」を生起させたのもわたくしの主観であれば、「テクスト」も主観のなかに生起するということになる。しかし、先ほども述べたように、たとえば『わたしを離さないで』を議論するときに、つねに元の文章に戻りながら議論しているわけではない。もちろん、

目の前にある文章を参照していても同じことである。あらゆる議論が論者の頭のなかに築かれた「テクスト」をもとにたたかわされているのだ。

このように考えてなお、「テクスト」についての考えはそれでよいのか、ほんとうによいのか、という疑問は残る。「テクスト」の指示する対象とは何か。

3 「テクスト」は指示対象を持たないのか

須貝の論及はわたくしの「テクスト」概念の曖昧さを鋭く指摘するものであったことは確かだ。が、先ほども述べたように、同書でわたくしはまた「テクストと読者との相互作用」のなかで立ち現れるものが「作品」であるという、イーザーやローゼンブラットの述べ方を支持し、これに従って論述を進めてもいる。この立場は同書で一貫させているつもりである。

わたくしはフランス語を読むことができないので[3]、唯一少しばかり読むことのできる英語文献のなかでの「テクスト」という語(より正確に言うなら「テクスト」という日本語に相当するtextという語)がどのように用いられているのか考察してみたい。

たとえば、アメリカの国語教育学者で文学に対する読者反応の研究で多くの著作を持つアラン・パーヴィスの遺作『テクストのウェブ・神のウェブ』の一節では次のように述べられている。

> When we think about interpretations, we think about them in relationship to the thing we call a text. The text is the common element of a large number of interpretations (or perhaps one of the common elements). But how we think of a text can vary; we can see it in relation to the author, to language, to other texts, to the world, and to the reader. That is, the text can be seen as an expression of an individual whose name we may know; someone wrote a letter or a book, and we can wonder what she meant. But we could simply see it as a selection or written language, in which case we would just examine the vocabulary and the grammar and see what meaning emerges from them. That is what people do when they try to decipher a strange or mysterious text like the Rosetta stone. Another way of looking at any one text is to see it in relation to all the other texts that have been written, as if it were a part of a large jigsaw puzzle of texts. Scholars of the Bible do this when they try to determine the relationship of one Gospel to another, or to determine where one group of prohets fits into the larger scheme of prophecy literature. Still another way of viewing the text is as a point of reference to an external world: for example, we assume that a set of numbers in a telephone directory is a signal for anyone to punch those numbers on a phone and speak to the person listed. We make the same assumption about history and many textbooks, that is, that the events they describe are what actually happened. Finally, we may think of text as being intended to affect an audience, that is, what happens to us as readers is what is important. Any text can be interpreted with reference to any one or more options in this set of relationships. None of them is any better or more correct than

any other, but scholarly wars are fought over which should prevail; and which one does prevail at a given time can affect a great number of other aspects of our mental and spiritual lives.(11)

【山元試訳】解釈について考えるとき、私たちは自分たちがテクストと呼ぶものとの関係で考えるものだ。テクストは多くの解釈の共通の要素なのである（あるいは、おそらく共通要素の一つである）。とはいえ、私たちのテクストについての考え方は多様である。私たちは、テクストを作者との関係で考えたり、言語との関係で考えたり、他のテクストとの関係で考えたり、世界との関係で考えたり、読者との関係で考えたりする。すなわち、テクストは私たちがその名を知る誰かの表現したものだと見なすことができる。誰かが文字か本を書いた。そして、私たちは彼女が何を意味しているのかということをあれこれと考えることができる。しかし、私たちはそれを単純に品物や書かれた言葉とみなすこともできる。その場合、私たちは語彙と文法を調べて、そこから生じる意味を理解するだけであろう。これは、ひとが、ロゼッタ・ストーンのように見慣れない謎めいたテクストを解読しようとする場合に行うことである。一つのテクストを見つめる今ひとつのやり方に、それがあたかも複数のテクストからなる大きなジグソーパズルの一部でもあるかのように、これまで書かれてきた他のあらゆるテクストとの関係で理解することがある。聖書の学者たちが、あるゴスペルは他のゴスペルとどのような関係を持つのかということを見きわめようとしたり、預言者の一団が予言書の大きな見取り図のどこに自分たちがいるのかを見きわめようとする場合にこのようなことをが行われる。さらに、テクストの今ひとつの見方として、それを現実との通路とするというものがある。たとえば、私たちは、電話帳のなかのひとそろいの数字を見て、それらの数字のキーを順に押せば、そのリストに載せられたひとと話すことができることを意味する信号だと推論する。私たちは同様の推論を、歴史や多くの教科書について行う。すなわち、それらに書かれてあるさまざまな出来事は実際に起こったことだと考えるのだ。最後に、私たちはオーディエンスに影響を及ぼすべく仕組まれたテクスト、すわなち、読者としての私たちに何が生じるのかということこそがもっとも大切なテクストのことを考えてもよい。いかなるテクストも、このような一連の関係において、一つかそれ以上の意見を参照しながら解釈されるだろう。他のものよりもよいとか正しいとかいうものはないが、どれが説得力を持つべきかということをめぐって学問的な闘いがみられる。ある時点で普及している考えが、私たちの精神生活の他の多くの側面に影響を及ぼすことができるのだ。

これは、パーヴィスがさまざまなtext（テクスト）を論じているくだりの一部であるが、それでも長い引用となってしまったことをお許しいただきたい。話題との関係でtextという語がたくさん用いられている。可算名詞として用いられていることは一目瞭然である。それゆえ、textという語そのものが、一応「実体」をあらわす語として用いられていると把握することは誤りではないと思われる。ここには、たとえばtextを「解釈の共通要素」と捉える見方が示されている。また、テクスト群の一部をなすものという捉え方、「現実との通路」という捉え方、読者側に何かをもたらすように仕掛けられたもの、という捉え方が示されている。拙い訳の終わり近

く、「他のものよりもよいとか正しいとかいうものはないが、どれが説得力を持つべきかということをめぐって学問的な闘いがみられる。ある時点で普及している考えが、私たちの精神生活の他の多くの側面に影響を及ぼすことができるのだ。」とある。パーヴィスのこうした考証は、textを「実体」として捉えながらも、それがさまざまな意味あいで用いられるということを示唆している。その意味で相対主義的であるのかもしれない。しかし、textの意味を誰かが絶対的に決定することを拒むという立場を堅持してもいる。これはパーヴィスが「読者反応」研究の立場に立つからという理由だけではあるまい。ここでパーヴィスが論じているのは、立場によるさまざまなtext観である。バルトのtext（正確にはtexteだろうが）もまた、バルト自身の立場に立ってtextを規定したものに過ぎないのではあるまいか。パーヴィスのこうした考察にしたがえば、従来わたくしたちが「作品」と呼び習わしてきたものが持つのと同様の指示対象をtextが有するという考え方もありうるということがわかる。

もちろん、主としてここでのパーヴィスの発言は、テクストと読者とのあいだで、あるいはテクストとテクストとのあいだで営まれる「関係」に焦点を当てている。その「関係」をどのように考えていくのかということが重要な点だと思われる。なぜか。文学教育において重要であり、揺さぶられ移り動くのは、読者が生み出す「テクスト」であり、反応の方であるからだ。「テクストと読者との相互作用過程」において生み出される「作品」の方だからだ。ここで言う「作品」は作家によって生み出された作品のことではない。読者たちがテクストと交渉しながら生み出す現象であり、それが生み出される過程。それらの半分は書き手の差し出したものに、そして半分は読者の抱いているものに左右される。

4　送り手を「裏切る」行為としての読み

カズオ・イシグロの『私を離さないで』は、英米でベストセラーになったばかりでなく、歴史に名を刻む小説として評価されている。一読していただければわかるのだが、この小説の舞台は〈ヘールシャム〉と呼ばれるイギリスのある種の施設だ。その施設は臓器の「提供」をするために育てられた子どもたちを育てる施設であることが、読むあいだにおぼろげにわかってくる。中心人物たちはその施設で育つ少年・少女たちである。この子たちの親はわからない。孤児院のようでもあり、そうでもない。そして、人物たちの運命がどのようになるのか、それは書かれていない。むしろ、そのような関係が明瞭にされていないからこそ、わたくしたち読者はこの小説を意味づけていくことができる。

だが、わたくしたちはこの小説を読んで多くのことを考えざるをえない。語り手〈キャシー・H〉が物語る、友人達や先生たちとの日常は、読み進めるにつれ、読者であるわたくしたちの日常とあまりにも異なりながら、しかし、あまりにも似通っているということに、わたくしたちはそれとなく気づくことになる。

わたくし自身はこの小説を十分読みこなせているわけではない。ただ、この語り手も〈トミー〉や〈ルース〉といった語り手の友人たちが、〈クローン人間〉なのではないかということは、『わたしを離さないで』に関するインターネット記事を読むまでは思い浮かべることができなかった。最後まで読み進めても〈ヘールシャム〉が

〈クローン人間〉の教育施設であるとはどこにも描かれていない。確かなのは、〈ヘールシャム〉を後にしたひとびとが〈提供者〉かその〈介護人〉となる以外に道は残されていないということだけだ。何しろ〈ヘールシャム〉で生きたひとびとは、セックスを禁じられてはいないにもかかわらず、自らの子どもを残すことは許されていない。また、それぞれのうちに残された記憶以外には、その過去も保証されてはいない。語り手の友人〈ルース〉の親を見かけたという情報を手がかりに〈ノーフォーク〉という町に数人で出かけるくだりがある。もしかすると親かもしれない存在を彼女たちは〈ポシブル〉と呼ぶ。親ではないのだ。可能性としての親を捜そうとする〈ルース〉たち登場人物の姿がそこには描かれる。

この小説を読んでいたときのわたくしは、ここに描かれているのが読者としてのわたくしたちの日常とはあまりにもかけ離れた世界のことだとも思った。そうなると、わたくしにとって『わたしを離さないで』の世界は絵空事である。自分とは関係のない世界だと、一度は考えた。しかし、よく考えてみると、先ほども述べたように、ここに描かれた絵空事の世界がわたくしの日常とあまりにもかけ離れてはいても、どこか恐ろしく共通するものがあるようにも思われた。〈クローン〉の技術がこの現代においてけっして絵空事ではないからなのかもしれない。わたくしたちが〈ヘールシャム〉のひとたちと同じように〈親〉も知らず、肩を寄せ合うひとびとでないと言い切れるか。〈失いつづけ〉てそれでも〈行くべき〉どこかを求めるひとでないと言い切れるか。

右に述べたことはわたくしという読者のうちに現象した『わたしを離さないで』という「作品」をことばにしたものである。右に描いたような「作品」をわたくしがわたくしの内部に作り上げているとき、わたくしはまさしく『わたしを離さないで』を「テクスト」としたのである。わたくし自身との似通いを感じ取り、それを自らにとって切実に感じたそのときに、わたくしは『わたしを離さないで』を「テクスト」として「作品」を生んだのである。それはカズオ・イシグロの生み出した「元の文章」がわたくしの内に生み出したものだと言えるのではないだろうか。だから、カズオ・イシグロがこのように書いているからこのように読むことができる、というふうに確証を得ることはむずかしいように思われるし、どれだけイシグロのことばを引用したところで説明することのかなわないことがらであるように思われる。

土屋政雄による邦訳『わたしを離さないで』の「解説」で、柴田元幸はこの小説の「静かで端正な語り口」のもたらす「物語の切迫感」を肯定的に評価した後、「内容をもう少し具体的に述べる」のが「解説の常道」だがそれは「避けたい」とし、その理由を次のように述べている。

> なぜならこの小説は、ごく控え目に言ってもものすごく変わった小説であり、作品世界を成り立たせている要素一つひとつを、読者が自分で発見すべきだと思うからだ。予備知識は少なければ少ないほどよい作品なのである（だからといって、再読に耐えないということはけっしてないが）[22]。

柴田の言は『わたしを離さないで』に向かうための一つの態度のあり方を示している。それは「読むこと」に対する一つの明確な態

度でもある。柴田はこの「解説」で「明敏な」読者として語ることをあえて避けているとも言うことができるだろう。もちろん「予備知識」があった方がわかりやすい小説もある。が、柴田の誘う『わたしを離さないで』との接し方とは、「わからなさ」をむしろ自らの「発見」の契機とすることである。確かに、『わたしを離さないで』というイシグロの生み出した小説を読みながら、同時にわたくしはわたくし自身を読んでいる。わたくしを取り巻く社会や状況を読んでいると言ってもよい。

『わたしを離さないで』の語り手〈キャシー・H〉が最後に語るのは、〈トミー〉と別れた後に〈ノーフォーク〉を訪れたときのことであった。〈ヘールシャム〉で教わった地理の〈エミリ先生〉が「静かないいところですが、見方によってはイギリスのロストコーナーとも言えます。」と教えてくれた場所〈ノーフォーク〉。

〈エミリ先生〉は「忘れられた土地」の意味で「ロストコーナー」と言った。しかし、生徒たちは〈ヘールシャム〉の四階にある「落とし物や忘れ物が保管される場所」のことを「ロストコーナー」と呼んでもいた。このことがきっかけになって〈キャシー・H〉の周囲の友人たちはいつしか〈ノーフォーク〉を「イギリスの遺失物保管所」と言うようになる。

その場所に立ち、〈キャシー・H〉は「半ば目を閉じ、この場所こそ、子供の頃から失いつづけてきたすべてのものの打ち上げられる場所、と想像」する。もちろん、彼女は、ずっとそのままその「場所」に留まるのではなく、程なくして車に乗ってその「場所」を後にするのだが、その行き先は「行くべきところ」としか書かれていない。

〈キャシー・H〉が一人ぼっちで「行くべきところ」とは「生きる」ことそのものと言ってもよいだろう。だとすれば、〈ノーフォーク〉は彼女の「生」の深みに横たわる記憶の象徴だと言えなくもない。友人たちとつながっていた過去を呼び起こしながら、生きるためにそれを中断せざるをえない「場所」だ。「失いつづけてきたすべてのものの打ち上げられる場所」と「行くべきところ」との間を往復することを、これから彼女はたった一人で幾たび経験するのだろう。生きてきた過去が記憶のなかにしかないとすれば、読むということはそれらが「打ち上げられる場所」に向き合い、忘れていた記憶を呼び起こすことではないのか。「失いつづけてきたすべてのものが打ち上げられる場所」と「行くべきところ」の間で、わたくしたちは「読む」のでないだろうか。

わたくしたちはイシグロの残した記述（それを土屋政雄が日本語に翻訳したもの）をもとにして、そこに描かれている「表徴」を捉え、自らの読みをつくりあげる。あたかも、顔をしかめておなかを押さえたひとを見て、〈腹痛を訴える人物〉だと解釈するひとのように。そして読者であるわたくしたちが、幾たびも読み返すことによって、その捉え方も変わっていくのだろう。それはある意味で『わたしを離さないで』の送り手を「裏切る」過程なのかもしれない。そうやって送り手であるイシグロを「裏切る」ことが、わたくしたちの「作品」を生み出し、読みをつくっていく営みでもある。「テクスト」はわたくしの「失いつづけたすべてのもの」を指示対象とする。だからこそ、わたくしがわたくしのなかに構成したそれを読むということが、わたくしたちの「行くべきところ」を探る営みとなるのである。それが、須貝の言う、「あらゆる言葉」が「対象その

もの」との「隔絶に晒されている」事態を生き延びる道であり、一筋の「希望」であると考える。

注

(1) 山元隆春『文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシー実践に向けて―』（溪水社　二〇〇五年四月）なお、本誌ではつとに中村哲也氏が、また、他誌で田中実、上谷順三郎、塚田泰彦、浜本純逸の各氏が書評・書籍紹介の欄で懇切丁寧に拙著を論じてくださった。この場を借り、記して感謝申し上げたい。

(2) 須貝千里「言葉ひとつ」（『日本文学』五五巻九号　二〇〇六年九月）六八～七三頁

(3) ロラン・バルト著、花輪光訳「作品からテクストへ」『物語の構造分析』（みすず書房　一九七九年一一月）九七頁

(4) 須貝前掲論文、七〇～七二頁

(5) ヴォルフガング・イーザー著、轡田収訳『行為としての読書―美的作用の理論―』（岩波書店　一九八二年三月）三四頁

(6) Rosenblatt, Louise M. 1938 (1983 3rd edition) *Exploration as Literature* Modern Language Association, p.25.　山元試訳

(7) Rosenblatt, *Ibid.*, p.35.　山元試訳

(8) 須貝前掲論文、七三頁下段

(9) カズオ・イシグロ著　土屋政雄訳『わたしを離さないで Never let me Go』（早川書房　二〇〇六年四月）

(10) フランス語の texte 概念については、「テクスト理論」以前の定義も含めて、次の文献に整理・検討が為されている。
後藤尚人「テクスト理論とその展開」『テクスト理論の展開とテクストの諸相』（一九九四年度教育研究学内特別経費研究報告書　岩手大学人文社会学部総合研究委員会　一九九五年三月）

(11) Purves, Alan C. 1998 *The Web of Text and the Web of God: An Essay on the Third Information Transformation.* The Guilford Press, pp.75-76.

(12) 柴田元幸「解説」　カズオ・イシグロ著　土屋政雄訳　前掲書　三四六頁

（やまもと・たかはる／広島大学）

「失いつづけたすべてのものの打ち上げられる場所」と「行くべきところ」との間で

山元隆春

なぜか。「テクストと読者との相互作用過程」において読者のうちに「作品」がどのように生み出されるかということが文学教育においては重要である。それらの半分は書き手の差し出したものに、そして半分は読者の抱いているものに左右される。

わたくしたちは書き手の残した記述をもとにして、そこに描かれている〈表徴〉を捉え、自らの読みをつくりあげる。読者であるわたくしたちが、幾たびも読み返すことによって、その捉え方は変わっていく。それはある意味でテクストの送り手を「裏切る」過程なのかもしれない。そうやってテクストの送り手を「裏切る」ことが、わたくしたちの「作品」を生み出し、読みをつくっていく営みでもある。「テクスト」はわたくしの「失いつづけたすべてのもの」を指示対象とする。そして、わたくしがわたくしのなかに構成したそれを読むということが、わたくしたちの「行くべきところ」を探る営みとなるのである。それが、須貝千里の言う、「あらゆる言葉」が「対象そのもの」との「隔絶に晒されている」事態を生き延びる道であり、一筋の「希望」であると考える。

Between "Where All Our Lost Things Are Cast Away" and "Where We Should Be": For the "Turn" and "Prospect" of the Teaching of Literature

Takaharu Yamamoto

In the teaching of literature, it is important to know the process of interaction in which we as readers are producing our own "text" in the act of reading. We are reading, interpreting, and all the while revising the text. As long as reading is a sort of creating something new, we may even undermine the author's intention. Probably through such procedure we try to reconstruct "what we have lost" in order to find "where we should be." This seems to be the only way to justify the act of reading in what Senri Sugai calls the "essential dissociation between language and its referents."